

古道調査・三峯参詣道(三峯表参道～三峯神社～妙法ヶ岳～大陽寺) 下見調査報告

日 時 : 令和5年9月28日(木)～29日(金) 両日とも晴れ
メンバー : L山崎保夫、中嶋信隆、浅田 稔(3名)、文責 : 松本敏夫

コース記録 :

○9月28日木曜日(1日目)

秩父鉄道・三峰口駅(10:00-10:25 出発)～大輪バス停(10:35)～三峯神社一ノ鳥居(10:40)～登龍橋及び五十二丁目標柱並びに第壱丁目石(10:40-10:48)～神庭洞窟分岐(10:50)～道標「秩父多摩甲斐国立公園 三峰山表参道」・三峰山ロープウェイ大輪駅跡(10:52)～道標「大輪0.7km、三峰神社3.0km」(10:59)～木製の橋(11:02)～第七丁目石(11:07)～道標「大輪1.1km-三峰神社2.6km」(11:10)～第十四丁目石(11:14)～第十六丁目石・ベンチ(11:22)～鉄パイプ製橋(11:34)～道標「大輪1.3km-三峰神社2.4km」(11:35)～清浄の滝(11:38-11:43)～第廿三丁目石(11:49)～道標「大輪1.8km-三峰神社1.9km」(11:53)～第廿五丁目石(11:56)～道標「大輪2.2km-三峰神社1.5km」(12:10)～薬師堂跡・施宿供養塔(12:14)～第参拾四丁目(12:36)～三拾五丁目石(12:37)～道標「大輪2.5km-三峰神社1.1km」(12:40)～第三拾六丁目石及び「溪谷の植生」(12:42)～宮沢家(13:00)～第四拾三丁目石(13:04)～広瀬家(13:09)～第四十七丁目石(13:15)～五拾二丁目石(13:35)～奥宮遥拝殿(13:35)～日本武尊像(13:37)～隨身門(13:43)～三峯神社本殿(13:54)～宿泊先(興雲閣)(14:00)

○9月29日金曜日(2日目)

三峯神社・興雲閣(8:54)～秩父宮記念三峰山博物館(8:59)～奥宮参道入口及び道標「三峰神社本殿550m-雲取山10.5km・霧藻ヶ峰3.6km-妙法ヶ岳(奥宮)2.5km」、秩父多摩甲斐国立公園・雲取山登山口(標高1100M)(9:01-9:07)～奥宮参道(白い石の鳥居で奥之宮の扁額)分岐(9:12)～カウンター・登山届提出箱(9:13)～奥宮参道(木製鳥居)及び石の道標「左奥宮、右白岩・雲取山」分岐(9:28)～木製看板「妙法ヶ岳(奥宮)1.4km-霧藻ヶ峰2.5km・雲取山9.4km」及び石標「左ハ奥社大日向山道・・・、右ハ雲採山ヲ超へ甲・・・」(9:29)～白い鳥居(奥宮の扁額)(10:00)～道標「妙法ヶ岳(奥宮)0.6km、霧藻ヶ峰2.2km、三峰神社2.9km」(10:04)～奥宮(10:20)～鳥居の分岐に戻る(11:04)～道標「三峰神社2.2km-妙法ヶ岳(奥宮)1.3km、霧藻ヶ峰1.5km、雲取山8.3km」(11:18)～炭窯跡(11:25)～地蔵峠(12:01-12:27)～道標「霧藻ヶ峰1.3km・大陽寺2.1km」(12:48)～道標「お清平(お経平)-霧藻ヶ峰1.7km-大陽寺1.7km・大日向3.0km」(12:55)～林道に道標「霧藻ヶ峰に至る・お清平(お経平)」及び東屋(13:04)～林道・道標「霧藻ヶ峰へ至る」(13:19)～朽ちたテーブルと椅子及び道標「霧藻ヶ峰2.7km-大陽寺0.7km・大日向2.0km」(13:29)～林道・道標「霧藻ヶ峰」・白い標識「林道を経由し 大血川溪流観光釣場」(13:41)～大陽寺入口(13:42-13:52)～道標「大陽寺入口バス停7.5km、大陽寺500m・シャクナゲ園400m」(14:00)～大血川林道通行止めの看板(14:33)～道標「国道140号(バス停)4.5km-霧藻ヶ峰」(14:46)～「むみょう橋」(14:51)～石仏(14:52)～林道大血川線終点(14:56)～石の道標(15:10)～二十五丁目石(15:14)～道標「大陽寺バス停入口2.2km-大陽寺5.8km-桔梗塚」(15:22)～地蔵堂・石標「大陽寺入口バス停1km-大陽寺7km」(15:34)～標識「大

日向山太陽寺(15:44)～大陽寺入口バス停(15:50)～三峰口駅(16:30)

記

三峯山参詣道の古道調査の範囲を検討するに際し、かつては三峯参詣の主要な宿であった贅川宿(三峯神社の一ノ鳥居があり、現在は秩父市)に一泊して、三峯道を辿って大輪から表参道を登って三峯神社に参詣したものと考えられます。したがって、調査範囲は贅川宿から猪鼻～強石～大達原～大輪～三峯神社を基本としました。更に今回は、妙法ヶ岳(三峯神社奥宮)から地蔵峠及び大陽寺経由して大陽寺入口バス停、三峰口駅を踏査する計画を立てました。また、贅川宿から大輪バス停に至る調査は、既に報告されている次の3種類の古道調査報告書を参照ください。調査順に、①古道調査・秩父往還(贅川宿～猪鼻～強石)下見調査報告書、②古道調査・旧秩父往還(三峰口駅～大達原～大輪～三峰口駅)下見調査報告書、③古道調査・三峯参詣道(三峰口駅～強石～大達原～大輪)下見調査報告書、として報告済です。

大滝村誌の三峰神社の条には「近世の三峯神社は、修験道・天台宗・真言宗の三宗兼帯をうたう祈祷寺院・観音院によって管理運営されていた。ここで言う祈祷寺院とは、徳川幕府の宗教政策にもとづく寺院制度上の檀家をもたず、檀家の墓地ももたない、したがって山麓住民の檀那寺ではなく、祈祷をおこなうことによって崇敬者・信徒が信仰の対象とする寺院のことである。・・・そうした事情から、眷属を狼(お犬様)として、その霊験・効験(除災、盗難、四足除け、五穀豊穰など)を中心にすえてから、お犬様を信奉する講社を組織して急速に信徒をふやし、経済基盤をかため、天台修験本山派の聖護院末寺内での権威と寺格をかためた。」とあり、三峰神社の発展の歴史が詳細に記されています。更に「旧三峰道 上強石から杉の峠への分岐点を左折し、坂道を下ると下強石。国道より一段上の家並みの旧道を進むと大滝発電所の水路管に突き当る。」とあり、強石から大達原を通り大輪に至る旧道が三峰道として報告されています。

新編武蔵風土記稿・秩父郡の三峯山の条に「三峯山は新古両大瀧村に攝まりし一巨山なり、・・・山名の起こりは雲採・白石・妙法ヶ嶽の三つは最も高く聳えたる峰なればとて、即ちこの山を稱して三峯山とよべり、・・・又は三峰権現の眷属と稱せる山犬を請ひ求むるに、錢帛を以てすれば、山は自ら日々月々に富有にして益盛なり、此山犬のことを於犬とよべり、・・・且山上の寺平常の住居五六十人、若しは七八十人、神社・佛閣・堂塔・門屋立つらねて一區をなせたるさまは、殊勝の境内なり、・・・表口とするは東にて大輪なり、初地には荒川の激流ありて、獨木の長十九間餘に及べる橋亘せり、ここに木華表あり、これを一の鳥居とす、これよりして、峻阪曲徑を登ること五十二町にして、絶頂にいたる、その間町ごとに石標を立て町敷を勒せり、・・・山の縁起は左の如し・・・十二代の帝景行天皇即位四十年、東國夷大に帝に背き、依之第二皇子日本武尊勅を蒙らせたまひて、・・・明年三月皇子それより甲斐國に至り、酒折の宮に留まりたまひて、暫軍勢を休めたまひ、四月三日再北轉を経て武蔵上野國に至りたまふ云々、當山の古記に曰、日本武尊酒折宮よりめぐり給るの土地、雁坂の山を越して直に當山に登たまひて、」と記されています。三峯山の名称の由来、表参道が五十二丁であること、山犬がご眷属であり、三峯山の隆盛に多大な貢献があったことなどが理解できます。また、荒川に架かる橋が19間餘の丸木橋であったことから、長さは約35mにもなる大きく長い橋であったことが理解できます。また、華表は神社の鳥居のことと考えられますので、江戸時代には大輪の登龍橋を越えた所に鳥居があったものと推測されます。

明治期の文豪、幸田露伴はその著書「知々夫紀行」で、熊谷から秩父往還を通り、登龍橋から表参道を登って三峯神社に詣でた紀行文があります。登龍橋付近の記載では「十八、九間もあるべき橋の折れ曲りて此方より彼方にわたれるが、その幅わずか三尺ばかりにして、しかも処々腐ちたれば、脚の下の荒川の水の青み渡りて流るるに見るにつけ、さすがに胸つぶれて心易からず、渡りわずらうばかりなり。むかしは独木橋なりしといえはその恐ろしさいうばかりなかりしならん。ようやくにして渡り終れば大華表ありて、華表のあなたは幾百年も経たりとおぼゆる老樹の杉の、幾本となく蔭暗きまで茂り合いたり。これより神の御山なりと思う心に、日の光だに漏らぬ樹蔭の涼しきさえ打添わりて、おのずあら身も引きしまるようにおぼゆ。山は上がり五十二町にして、一町ごとに町数を勒せる標石あり。路はすべて杉の立樹の蔭につき、繞り縈りて上がりはすれど、下りということ更になし。」と荒川を渡る橋の様子や杉の巨木に覆われた表参道の厳しさを表現しています。

秩父鉄道の終点である三峰口駅から、西武観光バスに乗り換え大輪バス停で下車します。バス停には公衆トイレと奥秩父観光案内図などがあります。また、三峰山ハイキングコース案内図には「三峰山表参道(大輪三峰線歩道) 大輪(おおわ)から三峯神社へ上がる道は、『三峰山表参道』と呼ばれ、江戸時代以前から続く三峯神社への参詣道である。大輪は表参道の入口にあたり、三峰の門前町として栄えた。一之鳥居(いちのとりい)は明治20年(1887)に奉納されたもので、荒川贅川宿から明治42年(1909)にここに移された。朱塗りの登龍橋は、大正3年(1914)に架け替えられた。今の橋は昭和29年(1954)のものである。昭和14年(1939)三峰空中ケーブル(三峰ロープウェイ：平成19年(2007)廃止)が開通するまでは、徒歩で五十二の丁目石を数えながら登った。」と記されています。



三峰口駅



大輪バス停



三峯神社一ノ鳥居

国道140号の横に白い大きな鳥居があり、贅川宿から移されたという三峯神社の一ノ鳥居で、扁額には「三峯神社」と記されていました。鳥居の左側は吉田屋、左右には御眷属の阿吽のオオカミ像(お犬様像)、その先は紅乃屋です。かつて紅乃屋の内部には、三峯講の参詣者と考えられる夥しい数の講名を記載した板が掲げられていて、如何に繁盛した店であったかを今に伝えていました。どちらもの店も往時は「三峯講」の信者で賑わった店でしたが、三峰山ロープウェイの廃止に伴い、参詣客が激変したことに因り、今はひっそりと店は閉められていました。紅乃屋の前の坂道を下ると三峯神社の登山口に至り、荒川の清流の上に赤い欄干の登龍橋が架けられています。



オオカミ像・紅乃屋



鳥居横のオオカミ像



登龍橋

登龍橋で荒川を渡ると参詣道の左側に夥しい数の奉納碑（苗木五千本、壹万本、金百円などと記されています）、参拝記念碑、第壹丁目石、苔むした常夜灯には「三峰山」の文字、オオカミ像及び「是より本社五十二丁」の大きな石柱などが林立する三峯神社の登山口です。



夥しい奉納碑



本社五十二丁の石標



常夜灯と壹丁目石

参道は敷石が敷き詰められ、右側の荒川に沿って欄干が連なっています。途中、標識「シヤクナゲ園・竜門の滝 0.2 km・神庭洞窟 0.7 km」があり、右側の荒川沿いに歩道が分岐しています。更に、清々しい杉並木のある敷石の美しい参道を進むと、石の階段の上にあった三峰山ロープウェイ大輪駅跡につきます。かつてはここからロープウェイに乗って、三峯神社の山頂駅まで行くことができました。ロープウェイは秩父鉄道の経営で、1939年5月から、大輪駅から一気に三峰山頂駅に至る区間を結び、2007年2月まで運航していました。ここには「秩父多摩甲斐国立公園 三峰山表参道」の看板と下部に「熊出没注意」があります。更に、「大輪・三峰山歩道 案内図（三峰山表参道）」の案内板が設置されています。



表参道



神庭洞窟への道標



ロープウェイ大輪駅跡

参詣道の左側には道標「大輪バス停 500mー三峯神社 3.2 km」があり、ここより先は未舗装の登山道に代わります。先に進むと、左上から流れ下る沢に木造の橋（長さ4~5m）が架けられています。また、左側の大木の根元に苔に覆われた第七丁目石があり、その先の左側に第十四丁目石がありました。清浄の滝の手前には、苔むした木製の橋が架けられています。



道標



木製の橋



十四丁目石

橋を渡ると左側に落差8~10mの「清浄の滝」があります。現在でも、修行者が滝行をし、水垢離をとって三峯神社に登拝するために、最適な雰囲気を残しています。説明板に「溪谷での生物、サンショウウオ 清浄の滝は落差が約10mあり、昔は三峯神社の信者の修行の場でもありました。溪流には、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオなど溪流性のサンショウウオが生息しています。ヒダサンショウウオやハコネサンショウウオは標高600mくらいの溪流やその周辺、あるいは石灰岩のある所に生息しています。甲武信岳、雲取山腹、両神山等の標高1,000~1,800の山地帯でもその生息が確認されていますが、近年では、生息環境が悪化しているところでは、その個体数を減らしています。人が溪流で食器を洗うだけで、これらの幼生がいなくなってしまうこともあります。ここは、標高570m 埼玉県・環境省」が設置されています。右側には鳥居が数基並んでいて「清浄宮」の扁額が掲げられています。滝行につきものの不動明王像は確認できませんが、信仰の篤さを物語る石祠が数基並んでいます。更に、休憩するためのか傍らに東屋もあり、苗木の奉納碑及び金参百円也と刻された東京府小岩町・葛飾講（昭和六年九月）などの碑が確認できます。



清浄の滝前の橋



清浄の滝



清浄宮

第廿二丁目を越えると道標「大輪1.8km-三峯神社1.9km」があり、急坂を越えると第廿五丁目（日光道中粕壁宿・・・國田屋七右衛門）があります。尾根上の開けた場所にある標識「秩父多摩甲斐国立公園 薬師堂跡」の傍には説明板には「薬師堂、施宿供養塔 この道は、三峯山表参道といい、ロープウェイも車もなかった頃の三峰参詣のメインルートでした。この場所は、その頃の参詣者のための休憩所だったところで、薬師如来の堂(女人堂)が併設され、病人などの看護も行っていたところです。遥かな道程を歩いて旅するものにとっては、医薬の神、薬師様がどれほど頼りになったことでしょうか。また、ここは三峰施宿供養塔が建立されています。これは、当時登山を許可されなかった女人や病気になった人、積雪のために進退できない人も無料で宿泊させたところで、その人数が3000人になったのを記念して明治9年(1872年)に塔が建てられました。ここは、標高710m 埼玉県・環境庁」と記されています。女人禁制時代の三峯山にとって、ここまでは誰でもが参詣できた場所であり、参詣者にとっては貴重な宿泊施設であったに違いありません。右側に5~6段に積まれた石垣に上の玉垣に囲まれて「廻国千人施宿供養塔」が2基並び、下部には小さな6

地蔵が安置されていました。また、古びた東屋、多数の石祠と供養塔も確認できます。



道標



薬師堂跡・東屋



薬師堂跡・供養塔

第参拾壹丁目石、第参拾四丁目（寄玉郡・小野岩五・）、第三拾五丁目（日光道中三本・鈴木・）及び説明板があり「溪谷の植生 このあたりには、参道の並木として保存されてきたスギ、ヒノキの巨木が良好な状態で生育しています。三峰神社を参詣した人々は、修業を兼ねてこの谷深い急峻な山を登っていったのでしょうか。ここより下の場所では並木はなくトチノキ、カツラ、サワグルミなどの大木を混えた良好な広葉樹の淡畔森が発達しており、また違った表情を我々に見せてくれます。 埼玉県・環境庁」と記されています。第参拾七丁目（寄玉郡百間・深井傳次郎）を過ぎると左側に宮澤岩雄の表札が掲げられた三峯神社の社家の前に出ます。既に廃屋のように見えますが使用されているか否かは未確認です。



三十四丁目



三十七丁目



宮澤家

第四拾貳丁目（寄玉郡百間・野口文左衛）、道標「大輪 3.1 km - 三峰神社 0.6 km」及び第四拾三丁目石、第四拾四丁目（鈴木善・）を過ぎ、なだらかな石段を登ると三峰神社の社家の一つである広瀬家につきます。更に、道標「大輪バス停 3.2 km - 三峰神社 560 m」、第四十七丁目石、道標「大輪バス停 3.6 km - 三峰神社 125 km」及び「秩父多摩甲斐国立公園 三峰山（園地）案内図」などを過ぎると間もなく立派な奥宮遥拝殿につきます。



第四拾三丁目



道標



広瀬家

遥拝殿からは妙法ヶ岳（奥宮）方面の展望が開け、すぐ先にある三峰神社の金属製（銅板製？）鳥居には「三峰神社」の扁額が架けられていました。また、鳥居の手前には「奉寄進 第五拾二丁目石供養塔」が設置され、表参道の終点であることが示されています。



遥拝殿



五十二丁



鳥居

鳥居を潜り、参道の両側に石灯籠が並ぶ石段を下ると隨身門手前の十字路にでます。ここを右折すると大山倍達記念碑や日本武尊像などがある観光スポットに出られます。小高い築山の頂上に太刀を佩き、右手を挙げた日本武尊像が設置されています。三峯神社の由来には、日本武尊は東征の際、甲斐国・酒折宮から雁坂峠を越えて三峯神社に登り、伊弉諾尊及び伊弉冉尊の二神を祀ったとされています。



隨身門手前の十字路



大山倍達記念碑



日本武尊像

朱塗りの格調高い隨身門には「三峯山」の扁額が掲げられています。明治初年の神仏分離令以前は観音院高雲寺の仁王門として、仁王像が安置されていました。神社として隨身門に換えられた際の仁王像は、鴻巣市にある浄土宗の古刹である勝願寺に移されました。石燈籠の続く参道を進むと三峯神社前の石段の下に出ます。石段の両側には凛々しいオオカミ像が安置され、青銅製の鳥居を越えると、朱塗りの八棟木灯台と白塗りされた絢爛豪華な手水舎があります。傍らの説明板には「青銅鳥居：弘化二年（1845）の建立で、江戸深川の堅川講中から奉納されたもの、荒川を筏で引いてきたということです。奉納者の中に初代塩原太助の名が見えます。八棟木灯台：安政四年（1857）建立の飾り灯台で高さ 6mあります。手水舎：先ず手を洗い口をすすいでお参りするのための施設であります。この建物は間口 3m・奥行 2m60 余、嘉永六年（1853）の建立です。精巧な竜の彫刻で有名です。石段：下の石段は嘉永二年（1849）神領三峯村の木村家が奉献したもので、上段は昭和四十一年東京築地市場講奉献です。」と記され、装飾過多の造形や極彩色の灯台及び手水舎は三峯神社の栄光の歴史を今に伝えています。江戸の木材業者が荒川を使って物資の運搬に利用していたこと、また火事・強盗が多かった江戸では、三峯神社のオオカミの護符が火防や盗難除けに著しく効果があると信じられていた結果であると思われます。



随身門



参道と燈籠



三峯神社手前の石段

青銅の鳥居の奥が三峯神社の本殿・拝殿です。拝殿前の説明板には「三峯神社 御祭神は伊弉諾尊・伊弉冉尊で日本民族の始祖と仰がれる神さまです。日本では最初の夫婦神で、日本国、民族はこの神によって産みなされました。創祀は景行天皇四十一年（111）日本武尊によって祀られ、後に神佛混淆のお山となり、別當観音院が設けられて山伏の修行場となりましたが、明治維新で本来の神社に戻りました。本殿は春日造、神のみ霊のお鎮まりになる御社殿で寛文元年（1661）再建、昭和三十六年復元。拝殿は祭典を行ったり皆さんが昇って拝禮するところで寛政十二年（1800）再建、昭和三十七年改築ありました。例大祭四月八日、新年祭二月二十日、新嘗祭十一月二十三日、冬季大祭十二月日二」と記され、秩父地方に多く残されている日本武尊伝説及び山伏が活躍していた頃は、火災除け・疫病除け・盗難除け・四足除けなどに効果のあるお犬様（オオカミの護符）が三峯神社を盛況にしていたことが分かります。

また、河田巖著の武蔵通志（山岳篇）には「三峯山 秩父郡大瀧村三峯村にあり、高さ三千尺妙法嶽と云雲採山・白岩山と三山鼎峙するを以て三峯と稱す。・・・荒川の崖に下り大輪橋を過ぐ一の華表あり、是より社域となす。峻坂曲径を登り、三峯村に入凡五十二町にて山頂に達す。石標を立て以て町敷を刻す。長檜古杉の間、巨石錯立し、登躋頗る難なり。上に縣社三峯神社あり、攢峯廻密の中に在るを以て気候高寒恒に雲霧多く陰晴變じ易し、」と表参道の鳥居や急峻な登山道の様子が記されています。



石段横のオオカミ像



八棟木灯台



手水舎

極彩色も鮮やかな権現造り拝殿の左側に進むと宿泊施設である興雲閣につきます。小教院の説明板には「小教院 『当山大縁起』によると、天平八年（736）国中に疱瘡が流行して国民が大いに苦しんだ。天皇は大變御心を悩まされて、諸国の神社に病氣平癒を祈られた。この時皇后は、諸国の靈山に観音を祀られ、国民の上を祈願された。この折、三峯神社にも郡領に命じて別殿を造立し、観音像を安置された。これが今日『小教院』と呼ばれる建物の創まりである。三峯神社別殿はやがて『三峯山本堂』として、ある時は天台宗に属して『高雲寺』と号し、また真言宗に移っては『観音院』と称え、更に修験はこれを『平等坊』と呼んだ。山王は十万石の格式をもって、古くは十里四方あるいは六里四方、降っては五十二町四方の地を支配した。明治の神佛分離により、この本堂は閉ざされ、政府による国民教化、

大教宣布運動にそって『小教院』と呼ばれ、この運動の終了は、宿坊として老朽化するにまかせていた。現在の建物は元文四年（1739）当山再中興日光法印の代に再建されたものである。平成三年御大典を記念し、歴史的建造物としての保存を中心に考え改修工事を行った。内部は二十四畳の『広間』、十二畳の『仙人の間』、八畳の『金の間』がある。」と本尊である十一面観音が安置された経緯や江戸時代の三峯神社が隆盛を極めた様子が伺えます。



三峯神社拝殿



興雲閣



小教院

興雲閣を出発し、静まり返った摂社・末社が立ち並ぶ境内を通過します。現在修理中の三ツ鳥居は工事のためシートに覆われていますが、白塗りの優美な鳥居が隠されています。傍らの三峯神社の説明板には「三峯神社御由緒 当社は今から1900年余の昔、日本武尊が東国の平安を祈り、伊弉諾、伊弉冉尊、二神をお祀りしたのが始まりです。尊の道案内をした山犬（狼）がお使いの神です。三峯の名は神社の東南にそびえる雲取・白岩・妙法の三山が美しく連なることから三峯宮と称されたことに因ります。奈良時代、修験道の開祖役小角が登山修行したと伝え、天平八年国々に疫病が流行した折、聖武天皇は当社に葛城連好久を使わして祈願され、大明神の神号を奉らえました。平安時代には僧空海が登山、三峯宮の旁に十一面観音像を奉祀して天下泰平を祈り、以来僧侶の奉仕するところとなりました。鎌倉時代、畠山重忠が祈願成就の御礼として、十里四方の土地を寄進しました。また、戦国時代には月観道満が諸国を勧進して天文二年に社殿を再建し、中興の祖と仰がれています。江戸時代、関東郡代伊奈半十郎検地の折、三里四方を境内地として除地され、寛文五年現在の本殿が造営されました。享保年間には、日光法印が社頭の復興に尽くし、御眷属信仰を広めて繁栄の基礎を固めました。寛政四年に隨身門（仁王門）、同十二年には拝殿が建立され、幕末まで聖護院天台派修験、関東の総本山として重きをなし、幕府から十万石の格式をもって遇されました。明治維新の神仏分離により、社僧と罷め佛寺を閉じ神社のもとなりました。明治六年郷社、同十六年県社に列せられ、戦後官制廃止により宗教法人三峯神社として現在に至っています。」と伝説も含め三峯神社の長い歴史が記されています。伊豆に配流された役行者が三峯山で修行したと伝えられ、修験の影響が強く残されています。三峯山の修験がどこの山々を修行の場所としたか記録はありませんが、雲取山は熊野古道に名を残す「大雲取越え・小雲取越え」からつけられたものと考えられ、金峰山（吉野の大峰奥駈道の主稜にある金峰山から名付けられた。）に至る奥秩父主稜縦走路が修行の場であったものと推測されます。



三峯神社の境内



修理前の三つ鳥居



秩父宮記念三峰山博物館

秩父宮記念三峰山博物館の前を過ぎ、大鳥屋や山麓亭を過ぎると右側に「奥宮参道入口」の立派な石柱があります。右側の下には古い石の道標「右ハ□シ□・・・、左ハ□□・・・大日向山□□・・・」が残されていますが、残念ながら文字が判読できません。左側に茶色の板に白文字で記された道標「三峰神社本殿 550mー雲取山 10.5 km・霧藻ヶ峰 3.6 kmー妙法ヶ岳 (奥宮) 2.5 km」及び「秩父多摩甲斐国立公園・雲取山登山口 (標高 1100M)」が設置されています。ここは舗装された杉並木の歩道を直進します。



奥宮参道入口碑



茶色の道標



古い石の道標

よく手入れのされた杉の植林帯の中を進むと、左手に標識「大輪 (表参道)ー奥宮・雲取山ー神社・秩父湖」がありますが、表参道 (大輪方面) への分岐を示すものであり、ここは直進します。この先の歩道の左側に白い石の立派な鳥居 (扁額は奥之宮) があり、奥宮への参道分岐を示しています。右側には道標「雲取山・霧藻ヶ峰・妙法ヶ岳 (奥宮)ー三峰神社」があり、左折して鳥居を潜り、杉の根を踏んで登ります。



表参道への分岐



奥宮への鳥居



奥宮・雲取山への道標

鳥居のすぐ右側に既成品の赤いポストを利用した「登山届投函箱」、入山者数確認のためのカウンター (5列に並び) があり、下段には「雲取山 安全登山マップ立体図」と「雲取山 安全登山マップ」が並んで貼ってあります。鳥居を潜った右側の説明板には「奥宮参道 (妙法ヶ岳登山道) この先、登山道、登山の装備が必要です。・奥宮への途中、クサリを使って岩を登る場所があります。・サンダルを履いた登山は大変危険ですのでやめましょう。・冬期は凍結します。凍結時はアイゼンを装着してください。奥宮 (妙法ヶ岳山頂) まで 2.3 km、奥宮まで徒歩 1 時間 (標準)」及び「雲取山登山道 (冬期) 登山道は、11

月から5月まで、降雪により凍結します。・登山口に雪がなくても、標高の高い場所では雪や氷が残っています。・滑落防止のため凍結箇所ではアイゼンを装着してください。特に、以下の個所は注意して通行してください。①芋ノ木ドッケ周辺；アイゼン未装着による滑落死亡事故が数件発生、②雲取山荘～雲取山頂の北斜面；アイゼン未装着による転倒事故が多発、雲取山山頂まで10.3km、雲取山頂まで徒歩5時間（標準） 埼玉県秩父環境管理事務所」などの安全登山を啓蒙する注意書が掲示してあります。



登山届箱とカウンター



安全登山注意書



奥宮への鳥居

奥宮への分岐が左側にあり、立派な木製鳥居（奥宮の扁額）があります。横には比較的新しい石の道標「左奥宮、右白岩・雲取山」が設置されています。また、木製道標には「妙法ヶ岳（奥宮）1.4km－霧藻ヶ峰2.5km・雲取山9.4km」と記され、古い石標には「左ハ奥社大日向山道 後ハ三峯神社ニ至ル、右ハ雲採山ヲ超ヘ甲州北都留郡府下西多摩郡ニ至ル、大正十一年大滝村分會青年團建設」と刻され、三峯山の古い歴史を伝えていますが、残念ながら文字の一部は不明瞭でした。



新しい石の道標



一般的な分岐を示す道標



古い石の道標

杉の樹林帯の中を登ると途中に道標「三峯神社 1.3km－妙法ヶ岳（奥宮）1.2km」が設置され、ベンチが置かれた平場を通過します。奥宮へと続く稜線の鞍部に立派な白い鳥居（奥宮の扁額）が設置されています。鳥居の手前右側には道標「妙法ヶ岳（奥宮）0.6km、霧藻ヶ峰2.2km、三峯神社2.9km」があり、奥宮と霧藻ヶ峰方面との分岐になっています。また、遭難防止対策と推測されますが、拍子木のように鳴らすことができる鉄パイプ2本が傍らに吊り下げられています。



ベンチの平場

道標

奥宮への鳥居

奥宮への歩きやすい参道を進み、赤く塗られた金属製パイプの手すりと鎖の付いた急な石段を登ります。基壇（4～5段）の上に玉垣で囲まれた格調高い奥宮（妙法ヶ岳山頂）があります。三峯山の奥宮らしく、御眷属であるオオカミ像（山犬像）が多数、石祠の周りを取り囲んでいました。



鉄パイプ製の拍子木

奥宮への石段

妙法ヶ岳山頂（奥宮）

奥宮からは同じ道を辿って鳥居のある分岐に戻ります。ここから真南方向に地蔵峠をめざして雲取山主稜縦走路へと進みます。途中、道標「霧藻ヶ峰 1.8 km、三峰神社 2.5 km、妙法ヶ岳（奥宮） 1.0 km」を通過します。まもなく三峯神社から雲取山への主稜縦走路に合流すると、道標「三峰神社 2.2 km - 妙法ヶ岳（奥宮） 1.3 km、霧藻ヶ峰 1.5 km、雲取山 8.3 km」があります。稜線を辿ると左側に炭竈跡の説明板があり、「炭窯跡 木炭は焼き方により黒炭（茶湯炭など）と白炭（備長炭など）」に分けられます。黒炭は通風口と排煙口を密閉して、窯に空気が入らないようにして消火します。白炭は炭化の最終段階で炭を窯の外へ掻き出し、水分を含ませた灰・土（消粉）をかぶせて消火します。炭の性質もそれぞれ異なります。この窯跡は白炭を焼いた白炭窯の跡です。セメントなどの資材のない昔、山の中にある土と石のみでは、密閉度の高い黒炭窯を築くことは、難しかったと考えられます。戦後、秩父地方では重労働の白炭から生産効率の良い黒炭に切り替わり、今では白炭の生産はなくなってしまいました。『烟たえて やく人もなき 炭かまの 跡のなげきを誰かこるらん』 新後撰和歌集 藤原信頼朝臣と記載があり、かつて秩父地方では炭焼きが主要な産業であった歴史を物語っています。



道標

主稜へ合流

炭窯跡

縦走路の尾根を登ると各種の道標・標識やベンチ・テーブルなどがある地蔵峠につきます。霧藻ヶ峰と大陽寺との分岐があり、小堂の中に赤い衣類で覆われた地蔵尊石像が安置されていました。地蔵峠の名前の由来が良く分かる峠道です。主要な峠らしく、道標「大陽寺 3.1 km、大日向 4.7 km - 三峰神社 3.5 km - 霧藻ヶ峰 0.3 km・雲取山 7.2 km」、「秩父多摩甲斐国立公園 地蔵峠」、石の道標「右ハ雲採山ヲ超ヘ北都留郡西多摩郡ニ至ル、左ハ大日向山旧道・後ハ三峯神社ニ至ル。大正十一年一月大滝・・・」が設置され、大陽寺や雲取山

への行程が示されています。



地蔵峠の地蔵尊



地蔵峠の石標



地蔵峠

雲取山への主稜縦走と分かれて、左方向（西）の大陽寺に下る登山道に入ります。右側に古くて手入れがされていない看板「強石大陽寺線歩道案内図」があり、地蔵峠から大陽寺への登山コースが記載されていました。

更に下ると古い苔むしたベンチとテーブルがある休憩所には、右側に道標「霧藻ヶ峰 0.9 km - 大陽寺 2.5 km ・ 大日向 3.9 km」があります。ここの説明板には「野生動物の痕跡 野生生物の多くは大変用心深く、夜行性の種類が多いため、日中その姿を見かけるチャンスはほとんどありません。しかし注意深く観察すると、彼らの生活した痕跡（足跡、食べ跡、糞など）を見つけることができます。足跡は湿った地面や雪上に見つけやすく、斜面にも歩道を横切って踏み崩した跡がよく見られます。これはシカやイノシシでしょう。また、大型動物が良く通る道（けもの道）は、草の茎が折られ、よく踏み固められているので、人間にも歩きやすく、これらの道がやがて登山道になった例もあります。2つに割られたクルミもよく見かけます。これはリスの仕業です。リスは絶えず伸び続ける頑丈な歯を持っているので、合わせ目を削り、半分に割って中身を食べるのです。丸い穴が開いているのはネズミの仕業です。また、樹皮がはぎ取られていたばら、それはウサギやシカの食べ跡です。環境省・埼玉県」と野生動物たちの生態が詳しく記されています。



大陽寺へ下る



ベンチとテーブル



道標

ベンチが設置された平場には説明板「奥山の動物 この地域は、地形的にも複雑で、奥多摩や山梨県にかけて広大な森林が連続しているため、カモシカ、ホンシュウシカ、ツキノワグマ、イノシシ、キツネ、タヌキ、イタチなど日本を代表する動物の宝庫となっています。これらの野生動物を守っていくためにも、今の自然環境を保護していく必要があります。環境省・埼玉県」と記され、自然環境保護の重要さが指摘されています。更に道標「霧藻ヶ峰 1.3 km - 大陽寺 2.1 km」がある場所には、今までも数カ所にあった鉄パイプ製の拍子木が2本吊るされていました。



「奥山の動物」の説明板



道標



鉄パイプ製の拍子木

雑木林に覆われた急な下りの登山道は古い歴史を感じさせます。道標「お清平（お経平）－霧藻ヶ峰－大陽寺 1.7 km・大日向 3.0 km」があり、地蔵峠や霧藻ヶ峰を巻いて、お清平に向う道の分岐です。新しい注意書には「大血川 高ヲ子奥 県造林、樹林を愛しみどりの県土を守りましょう 1. 山はたき火、たばこ等 火のあつかいに注意しましょう 1. 山のエチケットを守りゴミは持ち帰りましょう 埼玉県」と記されています。「高ヲ子奥」は地名と思われるが、未調査です。



登山道



道標



注意版

丸太で支えられた急な階段を下ると林道にでます。立派な東屋があり、林道出口には道標「霧藻ヶ峰に至る お清平（お経平）」が設置されています。更に比較的新しい説明板「森林管理道 大血川線 大血川線は、秩父市大血川地区と三峰地区をむすぶ延長 12.3 km の森林管理道です。この森林管理道は、木材の搬出や森林の整備のほかに災害時における迂回路や雲取山、三峰神社や大陽寺へのアクセス道路としても利用されています。森林管理道は主に次の役割を果たしています。①水資源のかん養など森林の持つ様々な機能をより高める森林整備が可能になります。②木材搬出経費の軽減など林業経営の効率化を図ります。③山村地域の重要な道路網を形成します。なお、道幅が狭く急カーブも多いので、通行には十分にご注意下さい。 お問い合わせ 埼玉県秩父農林振興センター」が設置され、林道は大血川と三峯神社を結ぶ森林管理道であることが示されています。



林道への出口



林道出口の標識



林道沿いの東屋

林道を横切り向かい側の登山道に入ります。杉の樹林の中のよく整備された階段状の道を下ると、先ほどの林道の先にショットカットで出られます。道標「霧藻ヶ峰へ至る」が出

口に設置されています。更に、林道を横切って向かい側の比較的整備された登山道に入ります。道の途中の左側に白い標識があり「霧藻ヶ峰ー大陽寺」と記されています。右側には道標「大陽寺に至る」があります。



登山道



林道出口へ



左に白い標識

更に下ると倒木のある荒廃した登山道に変わり、登山道の左側に朽ち果てて苔むしたテーブルと椅子が2組残されています。道標「霧藻ヶ峰 2.7 kmー大陽寺 0.7 km・大日向 2.0 km」を越えてしばらく進むと、先ほどの林道に合流できます。森林管理道・大血川線の開通により、登山道の利用者が減少したことで、登山道が荒れてきたものと推測されます。この林道は大陽寺の南側を大きく迂回（巻く）した後、西谷沿いに北上して大血川観光釣場に至る道です。林道に出る下り坂には転落防止のためか右側に列になった丸太が索で結ばれ、左斜面は落石防止のネットが設置されていました。



荒れた登山道



朽ちたベンチ



林道出口

林道から東に下ると大陽寺につきますが、現在、大陽寺は登山者の通行を禁止しているため登山道は「通行止め」になっています。また、林道横の道標は「霧藻ヶ峰」と霧藻ヶ峰への登山口であることを示しています。一方、白い標識「林道を経由し 大血川溪流観光釣場」と地図が添えられていました。また、「大陽寺～大血川溪流観光釣場までは通行止め、登山道迂回路（林道）」の記載があり、大陽寺の境内には入らずに、林道を辿って迂回する必要があります。大陽寺への分岐から林道大血川線を南に下り、西谷沿いを北上すると右側に大きな「大日向山大陽寺」と記された標柱があります。大陽寺の境内に入らず、林道で迂回することで、大陽寺入口に出ることができ、右側は大血川溪流観光釣場の入口になっています。更に、道標「大陽寺入口バス停 7.5 kmー大陽寺 500m・シャクナゲ園 400m（荒川溪流のむら・大滝）」が設置されています。

新編武蔵風土記稿・秩父郡の法性寺の条に「大陽寺（強石組にあり）、大日向山にて、一區の境界をなせし古道場なり、中頃袋養寺と書しが、又もとのごとく今の文字を用ゆ、大日向山と號す、臨濟宗にて鎌倉建長寺末なり、・・・本尊釋迦木坐像長七寸、外に彌陀白山の木立像あり、各長一尺七寸、開山佛國國師、…寺記の略傳に曰、武州秩父郡東女人高野、大日向山太陽寺、開山鬚僧大師は諱を顯日と云、曾て國師の號を賜ふ、其傳を尋るに、後嵯峨院第三の皇子にして、二條院仁治二年に嵯峨の離宮にて誕生し給ふ、」と古い伝統を継承す

る大陽寺の略歴が示されています。

また、大滝村誌の大陽寺の条では「本村を代表する古刹・大陽寺は鎌倉の臨済宗建長寺を本寺とする。大血川谷・大日向山中にあり、且・信徒らの寄進をうけて現在の境内地は五七八五平方メートルを占める。山号は『大日向山』。本尊は阿弥陀如来。伝説と言えば地元・大血川には平安時代初期の豪族・平将門にまつわる伝説があり、大陽寺には鎌倉時代初期の武将・畠山重忠が誕生した寺という伝説がある。・・・深い山の中にあり、いかにも修験道場の雰囲気を持たせようとした古刹でありながら、女性の登拝・参詣を受け入れてきたためか、いつの頃からか『東国女人高野』という別称を唱え、女人禁制の三峰山に参詣できない女性の参詣が多くあったと伝えている。」と記されています。風土記稿では本尊は釈迦如来と記されていますが、大滝村誌では阿弥陀如来となっています。禅宗の寺であれば本尊は釈迦如来が一般的と考えられますが、本尊の違いに関する詳細は未確認です。



白い標識



「大日向山大陽寺」標柱



道標

大血川林道を通行止めにするための立看板が 4 種類及び赤い三角コーンが数個設置されています。看板には「森林管理道大血川線 この先路面不良のため当分の間 通行止め (秩父農林振興センター)」などの記載があります。林道左側に大陽寺参道入口があり、苔むした石段の両側に大きな石灯籠が二基並んでいます。ここが大陽寺の表参道入口と思われます。右横に道標「国道 140 号 (バス停) 4.5 km - 霧藻ヶ峰」及び大きな「奥秩父観光案内図」が設置され、反対側には大血川溪流観光釣場があります。



通行止めの標識



大陽寺入口



奥秩父観光案内図

大血川を「むみょう橋」で渡ります。風土記稿に「無明橋 獨木橋にて長九間、幅一尺八寸、この山の麓にて大血川に亘せり、水際まで九間許」とあり、江戸時代から大血川に丸木橋が架けられていたことが理解できます。石仏や緑色の道標「林道奥大血川線終点」を過ぎると、石の道標「右ハ大日向山道 左ハ上大血川道、大正十一年一月 大滝村分會青年團建設」が設置されています。更に丁目石「二十五丁目 秩父町 峯□□□、松野」、その先の道標に「大陽寺入口バス停 2.2 km - 大陽寺 5.8 km - 桔梗塚 (荒川溪流のむら 大滝)」と記されています。

飯野頼治著「秩父往還いまむかし」に桔梗塚の伝説「大血川の右岸ぞいに・・・渡場大血川の集落への道に入ると左の石積みの上に、欠損した二基の五輪塔が置かれている。平将門

の妃、桔梗姫の墓ではないかといわれ、この墓地の斜面を『石塔平』とよんでいる。討死した将門の妻桔梗の前は、侍女三人、近習九九人と共にこの谷まで落ちてきたが、追手の追及厳しく全員自害してはてた。谷川は七日七夜血にそまり、これより『大血川』の地名が生まれたという。」が記されています。大血川の名称は大変珍しいと考えられますが、将門伝説と関連づけられた秩父らしい伝説と思われます。また、風土記稿には「九十九前社 大血川にあり、村持、説大血川の條に辨ずるごとく、将門の妃の自殺したまひしを、祭りし社なりと云傳ふ」及び「大血川 荒川の向ふの一區にて、家數十八、東は古大瀧村の内大達原組に接し、西は三峯山を界ひ、南は大日向を孕み御林山に續き、・・・主人傳へ云、此処にて将門の妃九十九人自害せしとて、今尚古塚存せり、さてもその時血の流ること、七日七夜に及べりと云ふより、地名となるよし、一説には重忠この邊にて誕生せし川筋なればとて、於乳川と書せしとも云」と記されています。秩父の城峯山などに伝えられる桔梗伝説と類似の将門伝説と考えられますが、深谷市島山生まれの島山重忠の誕生伝説を併せ持つ懐の深さが、参詣者を和ませます。



無名橋



石仏



石の道標

赤く塗られた小さな地藏堂には地藏尊2基と石仏が安置されていました。また、傍に道標「大陽寺入口バス停 1km - 大陽寺 7km」もあります。大きな石柱に「後嵯峨帝皇子僧國禪師・東國女人高野靈場 大日向山太陽寺」と記された道標を過ぎると、間もなく国道140線に突き当たり、大陽寺入口バス停につきます。ここからは国道140号に沿って歩き、秩父鉄道・三峰口駅に戻りました。



桔梗塚への分岐



地藏堂



大日向山太陽寺の石柱



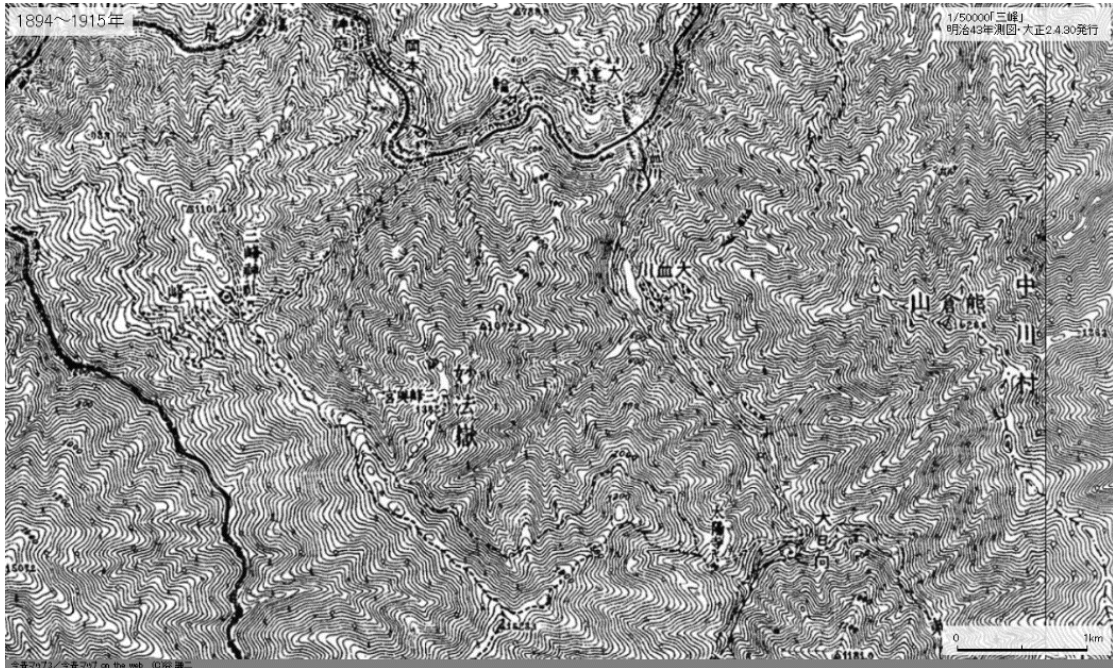
興雲閣にて



興雲閣前にて

参考文献

- 古道調査・秩父往還（贄川宿～猪鼻～強石）下見調査報告書
- 古道調査・秩父往還（三峰口駅・巢場新道～強石～杉ノ峠～落合）下見調査報告書
- 古道調査・三峯参詣道（三峰口駅～強石～大達原～大輪）下見調査報告書
- 大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第12巻）・秩父郡・古大瀧村及び
新大瀧村（雄山閣）、昭和四十六年二月二十五日発行
- 河田 熊著「武蔵通志（山岳篇）」、日本山岳会「山岳」第11巻1号（大正5年10月）
- 明治43年測図5万分の1地形図「三峰」
- 大滝村誌、編集・秩父市大滝村誌編さん委員会、発行・秩父市、
平成二三（2011年）三月三十一日発行
- 飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま双書）、平成11年2月25日発行
- 幸田露伴著「知々夫紀行」（山の旅 明治・大正編、近藤信行編、岩波文庫）、
2003年9月17日発行
- YAMAP GPS データ（国土地理院2万5千分の1地形図）「三峰」



五万分の一地形図「三峰」明治43年測図



YAMAP GPS ログ：大輪バス停から三峯神社（2万5千分の1地形図）



YAMA GPS ログ：三峯神社から大陽寺（2万5千分の1地形図）